

79

令和5年4月8日

50周年記念
行事特集号

明珠

龍泉院参禅会会報



坐禅堂と前庭の河津桜

『自未得度先度他』

春は花

夏ほととぎす 秋は月

冬雪さえて 冷しかりけり

(道元禅師)

『従容録』要録に代えて

口 宣

暦日は短促なりといへども、学道は幽遠なり

『正法眼蔵・身心学道』の巻の一節であります。暦日とは暦の上の一日一日ですが、これは短促です。非常に短い。鎌倉時代の暦は陰暦で、現在の暦とは基本的に違っています。個々一日の長さは現在と変わりなく、毎日の暦の一日は誠に短いのです。

「毎日の暦の一日は短いけれども、学道は幽遠である。幽遠とは誠に不可思議であって、永く遠い」という意味です。学道の日々には幽遠の長さがあるのです。

今から二〇年以上前になりますが、暮れの押し詰まったところ、大学の恩師の飯田利行先生からお電話をいただいたことがあります。何の電話かと思いましたが、「椎名さん、ワシはこれから『従容録』の注釈書を書かなければならない。それについて、『従容録』の一番古いテキストは何ですか」という質問でした。

私は即座に、「先生、日本には『従容録』の宋版や元版は無いんです。明の時代の万暦版というのが一番古いんです」とお答えしたら、「それはどこにあるかね」と聞いてもらいました。

「それは国立公文書館の中にあります」、「国立公文書館はどこにあるかね」、「大手町の毎日新聞社をご存じですか」、「かすかに知っているよ」、「毎日新聞社から皇居のお堀端に沿って西の方へ行かれると、国立近代美術館があります。近代美術館の手前の大きな建物が国立公文書館です。そこ

の二階に内閣文庫があります。そこでご要望を述べれば、『従容録』の一番古い本を出してくれます」と言いましたら、「そうか、行ってみましょう」と言われました。

「ところで先生はお幾つになられましたか」とお聞きすると、「九一です」。いやーびっくりしました。九一歳になられても、そういうことを心掛けてやられていらつしやる。

その時に囚らずも、「暦日は短促なりといえども、学道はまさに幽遠である」ということを、痛感いたしました。道を修める歩みは、幽遠の果てまで続いているのだなど。

私も老々の身になりましたが、まだまだ学道という物差しから見れば、幽遠の時節を歩いているに過ぎないと、いまだに感じております。

令和四年も残り何日もなく、正月が来れば令和五年を迎え、誠に暦日は短促です。しかし、学道は限りがなく、延々と続いてゆく幽遠の時を持っていることを常に問いかけて、己を鼓舞して参りたいと思うのであります。

「暦日は短促なりといへども、学道は幽遠なり」

令和四年二月二十五日 合掌

なお、これは五十嵐さんがまとめられたものです。

お断り

椎名東堂は大けがをなさり(詳細は次ページ参照)、『従容録』要録の執筆が出来なくなりました。そこで、編集委員会は、その対応策を検討した結果、昨年二月になされた椎名東堂の最後の口宣『暦日は短促なりといへども、学道は幽遠なり』を掲載することにいたしました。ご了承ください。

参禅会の大変革

口宣、提唱の交代

参禅会は一昨年、五〇年を迎え、大きな転機に見舞われた。

第一が例会での椎名東堂と明石住職の交代である。これまで、坐禅中の口宣と坐禅後の提唱は、椎名東堂がなされてきたが、一月の例会からは口宣は明石住職が行い、『正法眼蔵』の提唱も二月から明石住職に代わられた。口宣と提唱は、椎名東堂が行われていたので、大変革ともいえる。もともと、明石住職は「提唱というより、『正法眼蔵』を読む講座みたいな感じにしたい」と述べられている。

月番幹事、会計係の導入

第二が幹事である。これまで、年番幹事は二人が務めてきたが、なり手がなく、今年には佐藤さんひとりになった。しかし、これでは荷が重いので、二カ月ごとに月番幹事を置くことにした。一、二月は山桐さん、三、四月は小林さん、五、六月は齋藤さんが勤めることが決まった。七月以降は未定。また、会計は岡本さんが担当することになった。今後は

年数回、例会で会計状況を報告するとしている。

参禅会のあり方の検討

第三が参禅会のあり方である。二月一日開かれた「五〇周年実行委員会の総括」で、小畑代表幹事が「五〇年でこれまでの参禅会は終わった。これからはゼロから出発し、次の五〇年に向かってのスタートにしたい。それを若い人をお願いしたい」と述べられた。

現在、参禅会は例会への参加者が減少、このままでは各種事業での資金・人材が足りない状況になる可能性が出てきた。これは、コロナで例会が行われないことが多かったのが一因だが、それ以外にも、いろいろあるとの意見があり、次のような提案が出された。

- ① 例会の時間を変えたり、短くする
- ② やめた方に理由を聞く
- ③ 来なくなった方に、誘いの葉書を出す
- ④ 新たな会員になった方に意見を聞く
- ⑤ 新たな参加者に例会の司会などをさせ、参加意欲を強める
- ⑥ 参禅会が今の形になった出発点を探る
- ⑦ 女性会員の獲得に力を注ぐ。そのため椅子坐禅も考える

⑧ 一つの形にこだわらない

このような各種意見をまとめるワーキンググループをつくり、案をまとめ、それを、小畑代表をはじめ参禅会員に提示、諾否を求める。作業は佐藤年番幹事、岡本、吉澤、小畑二郎、齋藤、中原の各氏が参加して行うことになった。

椎名東堂が大げが

椎名東堂は一月二十七日、物置の屋根に上って作業していたが、転落。数カ所を骨折する大げがをなさった。すぐ、近くの名戸ヶ谷我孫子病院に入院、手術を受けられた。幸い、命にかかわることはなかったが、入院を余儀なくされ、その後、千葉・柏リハビリテーション病院に転院し、リハビリを行われる予定です。

椎名東堂は『眼蔵会』の時に年に二回程度話されることを予定されていた。また、小畑代表幹事が入会される前の話もしたいし、これまで書かれた各種の論文をまとめた意向だった。だが、それもしばらくは延期になる可能性もある。参禅会員一同、椎名東堂の早期の回復を祈念したいと思います。

第五回『在家得度式』報告

柏市 杉浦 上太郎

◆五〇周年は、錦の織物

「龍泉院参禅会」は、昭和四十六年七月二五日、三七歳の椎名老師が八名の方と坐られたことに端を發します。

その中に初代代表幹事高間利介氏がおられました。平成二年からは病氣入院された高間氏に代わって小畑節朗氏が同役を引き継がれました。

「入退会自由、会則なし」という極めて門戸の広い自由性がありながら、厳肅な規律性も併せ持つという不思議さが当参禅会の会風であります。まさに『サンガ』といえるでしょう。

参禅会五〇周年の偉業達成の源泉は、比類のない椎名老師の指導力のもとより、お二人の代表幹事の献身的な支えがあったればこそだと思います。

いわば、参禅会は椎名老師と代表幹事が強く太い縦糸となり、歴代参禅会員が横糸と

なつて織り上げた尊い織物のよう思われま
す。

◆大覚悟の「第五回在家得度式」

大きな節目の五〇周年を記念し、二〇二二年一〇月二日、「第五回在家得度式」を龍泉院様のご協力を頂いて実施しました。



在家得度者とその支援者

戒師は椎名老師に、都管を明石直之住職にお勤め頂きました。

第一回「在家得度式」は、平成四年に参禅会発足二〇周年を記念して行われました。以後、三〇周年、三五周年、四〇周年を記念して行われてきました。

全五回の在家得度者は七五名。「仏弟子としての深い縁を生涯に生かして精進努力します」と誓って、得度を受けられました。因みに再得度を受けられた方の累計は四九名です。

今回の実施が決定した際、椎名老師は、「今回が最後の得度式になる覚悟で臨む」と述べられました。

小畑代表幹事も同様に「これが最後になる」と覚悟のほどを述べられ、実行委員の多くも、「心して臨まねば」という格別の覚悟を持ちました。



小畑代表幹事

◆「第五回在家得度式」実施内容

得度式の概要は次の通りです。

- 一 得度者（新）二一名・（再）一〇名
- 二 差 定

- ・一〇…〇〇 開会式
- ・一〇…四五 得度式（剃髪、安名・絡子授与、授菩薩戒、血脈授与、祝辞（説戒にかえて）



絢爛豪華な得度式の会場

- ・一一…一五 閉会式
- ・一二…四〇 記念写真撮影
- ・一三…〇〇 祝齋
- ・一三…四〇 茶話会
- ・一五…〇〇 解散

今回、新たに得度を受けられた方は一一名でしたが、うち、会員は七名。比較的会歴の浅い方や会員のご家族が多く、会場内の緊張感は今まで以上のように思えました。

得度式は、「剃髪」「安名・絡子授与」と進み、続いて核心部ともいふべき「授菩薩戒」を行いました。

三帰戒、三聚浄戒、十重禁戒と十六浄戒を全員でお唱えしました。最後に戒師の問いかけに、「能く保つ」（誓持戒）と大合唱で応え、最高潮となりました。

エピソードは、血脈授与です。血脈とは「これを受けた人は釈尊直系の仏弟子である」ということを証したもので、これを授与された得度者は、全員が絶対の覚悟を決めることになりました。

すべての儀式が終了し「祝齋」が行われました。「五観之偈」を唱えた後、小畑代表幹事の心尽くしの添菜による祝い膳を頂戴いたしました。

次いで「茶話会」です。冒頭、椎名老師より、各人の安名についての解説を賜りました。安名に込められた椎名老師の思いに皆、それぞれに感想を述べ、新たな覚悟をされたように見受けられました。

記念品として椎名老師が揮毫された「円相」が参加者全員に贈呈されました。これは得度者ごとに内容が異なったもの。椎名老師が苦心されました。



椎名老師が揮毫の上授与された「円相」

次いで明石住職より「絡子」の取扱いの作法につき、懇切丁寧な指導を賜りました。

最後は、参加者全員が得度を受けた感想を熱く語り合って終了となりました。

準備に一年数カ月をかけ、今得度式を厳修いたしました。

今活動を経験して皆一回り大きくなる。これぞ記念行事のご利益。只々有難や。

（合掌）

新在家得度者の挨拶

続く五〇年の基礎に

柏市 齋藤 正好（正學好道居士）

僭越ながら法弟代表としてご挨拶申し上げます。

本日は龍泉院参禅会五〇周年記念行事の一貫としての第五回在家得度式となります。一

正學好道居士

言で五〇周年と申しますが、改めて考えてみますと、五〇年という歲月は並大抵の長さではありません。

参禅会の発足は正確には五一年前



ですが、私の場合ですと、当時は一七歳の高校生でした。その若者をこの白髪頭の老人に変えてしまう気の遠くなるような年月を、ズーと参禅会の指導に費やしてこられた権名東堂のご尽力には、本当に頭が下がります。

これはまさに偉業と言っても大げさではないと思います。また、今回の得度式の会場として、快く龍泉院を提供して頂いた明石住職

にも感謝申し上げます。

参禅会の活動を思うとき、私たち新得度者にとつては諸先輩のお導きも忘れることはできません。

小畑代表幹事をはじめ、本日も一緒に再得度を受けられる先輩方も含め、諸先輩の皆様方のご指導があつてこそ、本日の得度式に臨むことができるのです。

また、最新号の『明珠』でお名前を知りましたが、五〇年前の発足当時の、高間初代代表幹事をはじめ、私などはお名前も存じ上げない、連綿と続くあまたの参禅会員皆様の不届の修行の結果があつてはじめて、本日の五〇周年記念行事があつたと思います。

私たちが本日得度式に臨むことができるのはそれらの会員方々の精進があつてのことと、肝に命じる必要があります。

本日以降、今度は私たち自身が、続く五〇年の礎になる気持ちで、「自未得度先度他」の教えを忘れずに、精進していかなければならないと考えます。

初めてのことゆえ、多少の緊張もあります。つつがなく、式が進行でき、挨拶とさせていただきます。

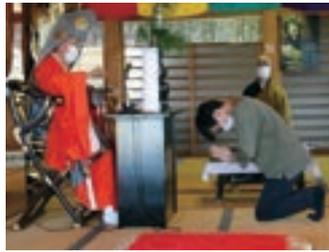
ありがとうございます。

日常の些細なことも大切に

流山市 市川 洋介（東海大洋居士）

第五回の在家得度式に参加した市川洋介です。得度式の後半で誓いの言葉割も頂きました。貴重な体験をさせて頂き、ありがとうございます。

今回授けて頂いた「戒」というのは、仏教徒が有意義に生活をしていくための努力目標と解釈しています。調べてみると「戒」とな



東海大洋居士

たサンスクリット語は「シーラ」といい、「習慣、性質」を意味するそうです。昔、自分が考えていたイメージとはだいぶ異なります。無秩序に向

かっていきやすいのが自然状態ですが、それを絶えず補正していった結果を自身の目で確かめさせるのが狙いなのだと思います。

部分があつて全体が構成されているというのは、意識するのが難しいかもしれませんが、戒の話を見聞きするうちに日常の習慣、癖というのが人生なのだと考えました。

また、禅だと「看脚下」などの言葉で、漫然とした生活の中でぼんやりした意識を自覚めさせようとするところがあるようです。

私は、生活の中で興味のあることに没頭する性質があります。その傾向が続いていくと、世の中において必要な経験や技術などが不足してしまおうと考えています。これではいかんと、最近はウインドウアプリの自作など新しいことにも挑戦しています。

新たな挑戦をする意志も大事だとは思いますが、それと同時に日常の微細なことも大切にしていきたいと思っています。

良い習慣を保ち、仏道に精進

我孫子市 吉澤 誠（徳山誠款居士）

本日は得度式にて正式な仏弟子にさせて頂き誠にありがとうございます。



徳山誠款居士

縁子を身につかせさせていただき、身が引き締まる思いです。ここまで坐禅を続けられ、正式な仏弟子となれたのも、椎名東堂、明石住職、そして参禅会の皆様

の御指導のおかげだと思っております。本日、椎名東堂より教えていただいた良い習慣を保ち、仏道に精進してまいりたいと思います。また、浅学非才のいたらぬ身であります。少しでも参禅会の活動に貢献できるように頑張っていきたいと思えます。

本日は誠にありがとうございました。

大器となるよう精進

我孫子市 小畑 学（大器好學居士）



大器好學居士

この度、五〇周年記念在家得度式に参加させて頂き、血脈を授かりました。安名は「大器好學居士」です。私の名前も學がついていきますので

運命的な物を感じました。大変嬉しく思っております。初めての得度式でしたが、貴重な体験をさせて頂きました。

図入りの説明資料が分かりやすく、法要に明るくない私でも滞ることなく事が運べて助かりました。改めてご尽力頂きました皆様に感謝を述べさせて頂きます。ありがとうございます

いました。

これからも日々学ぶ事を好しとし、大器と成れるよう精進して参りますので、皆様のご助力ご鞭撻のほどを宜しくお願い致します。

自分を見つめ直し、精進

白井市 中原 悦雄（大機禪悦居士）



大機禪悦居士

龍泉院の在家得度式が昨年一〇月二日（日）に厳粛に行われ、新規得度者として身の引き締まる思いで参加致しました。

私は、これまでの人生に、大きな悔恨の念があります。それは、人様の人生を左右するような体験です。小会社再建の命を受け、再建の道筋が見えた頃、意に反して、会社閉鎖の敝命を受け、約四〇〇名の人たちを解雇し、閉鎖終了後、責任をとり退職しました。

その後、前線から退き、好きな趣味に没頭していましたが、悔恨の念は消えませんでした。その時に脳裏に蘇ったのが、学生時代の恩師の「禅をやりなさい」という言葉でした。坐禅をしようと思ひ至り、龍泉院の門を叩か

せて頂きました。

約三年を経て、私にも得度の話を頂きました。私でよいのかと迷いがあり、先達の方に相談したところ、椎名東堂からも「この先何度までできる訳ではないし、これを機に仏道がスタートするのだと思ってやりなさい」とのアドバイスを頂きました。

自分の年齢を考え、尚、逡巡しましたが、意を決し、得度を受けさせて頂くことに致しました。

今後のことですが、得度を良い機会とし、仏道を通じて自分を見つめ直し、余生を精進していきたいと思っております。

弁道に心新た

柏市 石澤 健 (洞岳大健居士)

小生の満六四才の誕生日である一〇月二



洞岳大健居士

日、龍泉院五回目の在家得度式が挙行されてから早一カ月が過ぎてしまいました。法弟として、一名の初回参加者の一員として、

再得度の方一〇名と共に戒師である椎名東堂から剃髪の儀式、安名を頂きました。その後、戒師様の前に進み、明石住職より安名の入った絡子を首に掛けて頂きました。

戒師の後に全員で懺悔文、三帰戒、三聚淨戒、十重禁戒を各一句唱え、東堂老師の「能く保つや否や」の呼びかけに、全員で「能く保つ」と唱え、血脈を頂きました。

椎名東堂より「十重禁戒は厳密に守ることは難しいが普段の生活の中で最低限守って、常に自分をゆるぎの無いものにして欲しい」とのお話しをお伺いしました。血脈には釈尊から菩提達磨大師、天童如浄禅師、道元禅師を経て、大心宏雄老師から頂いたもので、安名は「洞岳大健」が記されてありました。修証儀に「衆生仏戒を受ければ、即ち諸仏の位に入る、位大覚に同うし已る、真に是れ諸仏の子なり」とあります。

三宝への信仰を確立することが、戒を受けることであり、悟りの位に入ることとのこと。このような貴重な体験をすることが出来たことに感謝致しますとともに、少しでも精進、弁道して行きたいとの気持ちを新たにしました。

安名を頂いて恥じない生き方を

柏市 坂牧 郁子 (梅林馥郁大姉)



梅林馥郁大姉

緊張感漂う厳かな得度式。戒師の椎名東堂、都管の明石住職、携わられた参禅会の皆様にご感謝しております。

安名「梅林馥郁大姉」を頂きました。

安名を見た瞬間、借楽園の梅まつりでの出来事が脳裏に蘇りました。

当時、認知症の義母を兄弟で見守ることを決めた矢先の主人の転勤。単身赴任を選び、私は義母と留守宅を守ることになりました。次の妹宅へ義母を送り届けた後の借楽園行き。夕方近く影が長く伸びて

♪木の影の手をつなぎる梅まつり♪

子供も独立し、四人四様の住まい方の我が家も実は心の中で繋がっているんだと納得でき、頑張る力になったことでした。

私の人生のひと時を見て頂いていたような安名に、これからも恥じない生き方をしたいと考えています。

合掌

「円」、素晴らしい贈り物

鎌ヶ谷市 青木 文雄（龍岳文明居士）

在家得度式の際、椎名老師・明石住職をはじめ参禅会の皆様には大変お世話になり、無



龍岳文明居士

事に在家得度を受けることができまし
た。心より感謝申し
上げます。

自分の今までの人
生を振り返ります
と、広い海を泳ぎ続
けて、手足を休める

と沈んでしまうのではないか。しつかり、ゆつ
くり、ときにはやく、疲れたら僅かの時間だ
け手足を休める。そんな思いでやってまいり
ました。

周囲に惑わされることなく、自分の人生を
泳ぎ切ったというところを目標にもがいて来
ましたが、昨今の新型コロナウイルスによる労働環境
の変化で脆くも溺れかけたところで、「龍泉院
で坐禅をしよう」ということにいたしました。

今般、椎名老師から直筆で「大きな円」が
書かれている色紙を頂戴しました。綴られて
いる文は「寒い時には寒さに徹底し、暑い時

には暑さに徹底せよ、寒中に熱あり、暑中に
涼あり。寒さ暑さに徹底すれば、並みの寒暑
は苦にならず、避けるに及ばぬ」ということ。
寒暑を生死の悩み、煩惱と見なすこともでき
るということが書かれているすばらしい贈り
物でした。「大きな円」の意味を知れば、人
生はもつと楽に泳ぎきることができるとは
ないかと想像しております。
今後よろしくお願いいたします。

在家得度秘話

記念アルバム

在家得度式の後、在家得度を受けた全員に
椎名東堂から大きなお祝いの色紙が配られ、
また、各人に記念の写真と椎名東堂の写真な
どが掲載されたアルバムが配られました。そ
の裏話をお伝えしましょう。

色紙は椎名東堂が書かれました。その数
四〇枚。得度者全員にそれぞれ内容の異なっ
た色紙で、それ以外の、名前も入っていない
色紙も書かれました。

椎名東堂はどのような文にするかを考え、
書くのに二週間以上かかったということだ
す。大きさは普通の色紙の約二倍。これは小

畑代表幹事が無料で提供されました。

また、得度者全員に写真入りのアルバムも
提供されました。このアルバムは小林さんが
撮影、杉浦さんがアルバムにして、贈られま
した。

すべて、「自未得度先度他」の精神で、無
料でした。勿論、費用はお二人が負担されま
した。

参加者のアルバムに掲載されている写真で
は東堂老師の背景は白くなっています。実は
最初は色がついていましたが、これだと、東
堂老師の袈裟がえんじ色になり、本来の赤に
はなりません。そこで、小林さんが苦労して
背景を白にしたところ見事な朱色になったと
いうことです。アル



バムも見事な装丁。
杉浦さんは「志納箱」
などで、高度の工芸
技術を持たれていま

すが、それがアルバムでも発揮されました。
在家得度だけでなく、「洞山禪師千百五十
回遠忌」でも五十嵐さんが苦労され、全体を
統括した小畑代表幹事の苦労も並大抵ではな
かったと推察しています。

多謝をささげたいと思います。

説戒に代えて

椎名東堂

得度式の後、椎名東堂はこれまで「説戒」を語られましたが、今回は「説戒に代えて」として次のような祝辞を述べられました。

お釈迦さまは信徒の生活に対し、細かいルールをもうけ、それが後に戒律といわれるようになりました。仏教には多くの戒律があり、「仏教は戒律宗教」ともいわれています。

しかし、これは生活を束縛するものではなく、精神を楽にするために定めたものです。

東日本大震災の時「絆」という言葉がはやりました。絆とは本来は野生動物を家畜化するために、杭を立て縛ったものです。いわば、逃げないよう拘束・束縛するのが絆でした。しかし、戒律は人を束縛するのではなく、人と人を繋ぎ、「精神開放の取り決め」ともいべきものです。

戒律の数はインドでは男性が二五〇、女性が三五〇ともいわれています。しかし、そのような多くの数はなかなか守れず、中国では菩薩になるための数少ない軽戒になりました。

日本ではさらに減らされました。天台宗の創始者最澄は「四八の戒律を守ればよい」とし、道元禪師はそれを『三帰戒』、『三聚浄戒』、

『十重禁戒』の一六でよいとしました。

中国、韓国ではまだ二五〇戒を教えているところが多いです。私は駒澤大学の大学院で教鞭をとりましたが、この時、韓国の一留學生に戒律はいくつあるか聞いたところ、「二五〇ある」との答えがありました。そのうちいくつ覚えていくか聞いたところ、「一つも覚えていない」とのことでした。いくら多くの戒律を受け



戒師役の椎名東堂

ても、一つも覚えていないと意味はありません。だが、道元禪師は戒律を軽く見たわけではありません。というのも、数多くの著作の中で生活の規範を微に入り細にわたって定められているからです。中には洗面の仕方、トイレの使い方などもあり、『典座要典』という、食事の作り方まで述べられています。これらを「清規」といいます。

と言っても清規は一つではありません。永平寺と總持寺で異なっており、大きな寺院はそれぞれ、昔から清規を持っています。

曹洞宗では清規は形式的なものではなく、守るべき実践なのです。『三聚浄戒』では「よいことをする。悪いことはしない」として、利他行を勧めています。

『十重禁戒』は、ほとんど守ることはできません。「殺生をするな」と言っても、虫が出れば殺虫剤を使います。嘘をつくなど言っても実際は日々、みんな嘘をついています。

第三の『不邪淫戒』も守れません。私は過去五〇年で一番困ったのはある会員の不倫でした。幸い、夫婦の仲は戻りました。

問題はそれが常態化するかどうかです。いわば、戒律とは「最低限守らなければならぬもの」であり、生き様をゆるぎないものにするものです。言い換えると「生活習慣」ともいえます。よい生活習慣を作れば、戒律は守れます。そして、良い生活習慣を作れば利他行にもなります。

私は「朝食では肉と魚は食べない」として守ってきました。今では、朝食では食べる気がしません。生活習慣をつくと、自然に守れるようになります。是非、皆さん良い生活習慣をつくって、それを人生の糧としてください。そのための本日の在家授戒会が無事、円成し、本当におめでとうございます。

洞山禅師千百五十回遠忌

柏市 五十嵐 嗣郎

龍泉院参禅会五〇周年を迎えるにあたり、小畑代表から「洞山良价禅師千百五十回忌を記念行事としてはどうか」との相談がありました。椎名東堂が『洞山』を上梓されていることもあり、「最適な行事である」と小畑代表に申し上げました。

椎名東堂に洞山良价禅師に関する記念講演をお願いし、『石頭』を上梓されている駒澤大学名誉教授石井修道先生との対談を企画しました。ところが、椎名東堂が「記念の講演は石井先生にお願いしたい」とのことでした。そこで、石井先生には椎名東堂からの要望であることを申し上げ、了解を頂きました。記念講演の題目は『洞山良价禅師の千百五十回遠忌に想う』、対談の主題は『中国禅と道元禅』、副題として「中国禅とのつながりを考える」としました。

実行委員会で二〇二二年一〇月三〇日の実施が決まり、参加者募集のチラシ作成を杉浦さんをお願いしました。

チラシを五〇〇部印刷して、七月の定例参禅会で配布を開始し、記念講演・対談の参加者募集に取り掛かりました。

「洞山良价禅師千百五十回遠忌」の前日、有志で会場設営にあたりました。杉浦さんが寄進された「洞山良价禅師千百五十回遠忌の本主」を須弥壇に安置し、龍泉院所蔵の「洞山過水図」の掛軸を掛け、その前に香台を設置しました。

さらに、小畑代表が「花ヒロ」さんに注文されたスタンド生花一对と大きな盛花をセツト、本堂は一瞬にして素晴らしい講演会場へと変身しました。

一〇月三〇日午前九時、実行委員は本堂に集合、行動計画について打ち合わせ、確認を行った後、「洞山良价禅師千百五十回遠忌」報恩の坐禅を一炷行いました。

記念講演をしてくださる石井修道先生や東京都荒川区の正覚寺ご住職の山田悠光老師とお弟子の裕証さんも参禅されました。

午前十一時、「記念法要」が始まり、雅楽が奏でられ、七下鐘が打たれる中、導師になられた椎名東堂をはじめ、先導の佐藤さん、侍者の松井さん、侍香の山桐さんが入堂しました。

上香普同三拝の後、「洞山良价禅師千百五十回遠忌」を行うことを佛祖真前に告白する表白文を椎名東堂が読み上げ、次いで洞山良价禅師の遺徳を偲んで、拈香法語を読み上げられました。

拈香法語が終わると献茶湯に移りました。献茶湯は参禅会としては初めてですが、何度も練習したお陰で、スムーズに進み、堂内は厳肅な雰囲気になりました。

献茶湯が済み、次は『参同契』と『宝鏡三昧』を全員でお唱えしました。参禅会での二つのお経を誦誦するのは初めてなので、二度ほど練習しましたが、お唱えがうまく揃わず、洞山禅師に失礼したかもしれません。

その後、維那役の杉浦さんが回向文を読み上げ、普同三拝した後、導師一行は退堂されました。

記念法要の参加者はお役も含めて三〇名弱。日本で唯一の「洞山良价禅師千百五十回遠忌」法要が無事円成いたしました。

「記念法要」が終わり、昼食タイムとなり、小畑代表が用意された「なだ万」の豪華なお弁当をいただきました。昼食後、午後一時からの記念講演が開始されました。

司会役の小畑二郎さんの開会の辞に次い

で、椎名東堂の挨拶と石井修道先生の紹介があり、石井先生のご講演「洞山良价禅師の千百五十回遠忌に想う」が始まりました。概要は次の通りです。（詳細は講演のページに）

洞山研究には九五二年に編纂された『祖堂集』が最も基本となる資料で、『祖堂集』によれば、洞山は雲巖曇晟の下で永年懸案だった「無情説法」の疑問を氷解するも、雲巖から言われた「このほかならぬ、ありのままの男がそうだ（只這箇漢是）」の一句の意味が分からず、雲巖と別れることになりました。

大河を渡る時、河に映った自分の影を見て悟りました。このとき詠まれた偈が「洞山過水の偈」です。石井先生が「洞山過水の偈」について渾身の力を振り絞り説明されている時に、急病の人が出たため中断。記念講演の一番ハイライトの箇所だったので、先生も意表を突かれた様子でした。

「洞山過水の偈」についてのお話の後、曹洞禅は納まり返らない禅であり、道元禅師も「八九成」という言葉を使われていますが、十という完成された姿ではなく、十をも超えた動的なところに価値を見出すのが曹洞宗の特長であると述べられました。

最後に、悟という世界に落ち着いてしま

と、そこでストップしてしまふ。悟にとどまらず、仏に到りても更に仏の上を行く、無限の可能性を追求して行くところに、洞山良价禅師の素晴らしさがある。そのことは道元禅師が『仏向上事』の巻で述べられていると締め括られました。

石井先生の記念講演が終わり、石井先生と椎名東堂との対談、「『中国禅と道元禅』〜中国禅とのつながりを考える〜」に移りました。

最初、石井先生から、道元禅師が入宋された当時の中国の禅宗の様相についてのお話がありました。

道元禅師は大慧が批判した「黙照邪禅」ではなく、坐禅することが仏の行であるという、「本証妙修」の立場に立った悟の禅を日本にもたらされたのだと言われました。

また、道元禅師の公案集には中国の禅籍通りでない例が少なからずあり、有名な「磨磚作鏡」の話がその例で、中国禅では「瓦を磨いても鏡にはならない」という話が、道元禅師は「瓦を磨くと鏡になる」と仰っている。

道元禅師の公案集は中国の典籍のままでないところに、非常に大きな意味があり、学的にみると、道元禅は中国禅とは必ずしも連続していない非連続の面があることを、石井

先生はご指摘されていました。

椎名東堂からは、寺の基本は修行であり、その中心は禅的には坐禅である。道元禅師は宋代の複雑な頭で考える禅ではなく、釈尊の教を純粹に護ろうとした唐代の禅に戻る、釈尊の精神に戻ることを、宗教者として基本にされていたのではないかと指摘されました。そして、何よりも「行」と「実践」が重んじられ、生活の中に清規を活かして行くことを強調することこそ、曹洞禅の存在理由であると締め括っておられました。

◇ ◇

対談が終わり、最後に小畑代表から次のようなご挨拶がありました。

五〇周年の行事は皆様のご協力により無事円成いたしました。本当に有難い次第です。両先生には御礼を申し上げ、更に参禅会員の皆様、本日お見えになられた皆様に御礼を申し上げます。

なお、「洞山良价禅師千百五十回遠忌」参加者は八五名で、多くの方からお祝い金やお品物をいただきました。紙上をお借りして御礼を申し上げます。また、「洞山良价禅師千百五十回遠忌」に関する動画を撮りました。ユーチューブでご覧になれます。

合掌

石井修道先生講演

「洞山禪師の千百五十回遠忌に想う」

二〇二二年一月三〇日、「洞山良价禪師千百五十回遠忌」の法要が行われ、午後一時から石井修道先生の記念講演が催されました。

冒頭、洞山良价禪師の遠忌の法要について、日本曹洞宗ではほとんど行われたこととはなく、今回、龍泉院で「洞山良价禪師千百五十



法話を語る石井修道先生

回遠忌」の法要を行うのは、非常に貴重な行事であると述べられました。次に中国と日本の禪宗寺院の違いについて述べられました。

日本は本山制度ですが、中国は十方住持制のため、人には宗派がありますが、寺院には

宗派がなく、新任住持を迎える際は、その僧の法系や門派は問いません。道元禪師が修行された天童山景德禪寺は、代々、臨済宗の方が多く住持されてきましたが、たまたま、道元禪師が天童山に入られた時、曹洞宗の如浄禪師が住持を務めておられました。如浄禪師の法を嗣がれたので、道元禪師は曹洞宗の宗派に入るようになったのです。

次に曹洞宗という呼称についてのお話がありました。

曹洞宗の「曹」は洞山禪師の法嗣の曹山本寂禪師の曹であり、「洞」は洞山禪師の洞です。普通ならば洞曹 (Dong Cao) と言うところを曹洞 (Cao Dong) と言うのは、『祖庭事苑』によれば、「語便」に由ると書かれています。なお、語便とは辞書で確かめられ無いので、語呂が良いほどの意味として理解しておきます。

洞山禪師が上堂などで述べられた言葉をまとめた語録の『洞山悟本大師語録』は、明代にまとめられたものです。洞山禪師の言葉を扱った最も古いものは、九五二年に成立した『祖堂集』です。ですから、洞山を研究するには『祖堂集』が最も重視されるのです。

『祖堂集』巻一六『南泉普願』章によれば、

洞山禪師の師の雲巖曇晟禪師は葉山惟儼禪師のもとで、異類中行について悟れなかったことが述べられています。その雲巖さんに師事した洞山さんは、長年の懸案だった無情説法について質問すると、「わしの説法ささえ聞けなくて、どうして無情の説法を聞くことができようか」と言われ、無情説法は耳で聴こうとしても絶対にはわからない、眼で無情が説法する声聞いてはじめて知ることができると悟るのです。

石井先生は、耳をそばだててきこうとするのが「聴」で、自ずからきこえてくるのが「聞」であると、聴と聞の違いを教えてくださいました。

次に洞山良价禪師が本当の悟りを開かれた様子についてのお話がありました。

師の雲巖さんの遷化に臨んだ時、洞山さんが、「ある人から『あなたは師の法を嗣ぎましたか』と問われたら、どのように答えたらよろしいでしょうか」と雲巖さんに問うと、雲巖さんは、「その者に『このほかならぬありのまま男がそうだ』と答えなさい」と言われました。

洞山さんはこの一句の意味が分からず黙り込むと、雲巖さんがその意味するところを言

葉で教えようとなりました。しかし、洞山さんはそれを拒否されたのです。

結局、洞山さんは雲巖さんに悟を認められることなく、雲巖さんと別れることになりました。雲巖さんの三回忌を済ませて、神山僧密師伯と瀧山へ行く途中、大きな川を渡ろうとした時、川の途中で水に映ったわが姿を見て、雲巖さんの言われた『このほかならぬありのまま男がそうだ』の意味を悟ることができたのです。

大悟して大声で笑いだした洞山さんを見て、兄弟子の密師伯が「どうしたのだ」と問うと、洞山さんは、「雲巖先師のお導きのおかげを体得することができました」と答えました。そうすると密師伯は、「もしそうならば、悟った内容を言葉であらわせ」と言うのです（この部分は『祖堂集』だけに見えます）。そこで洞山さんは「過水の偈」を詠うのです。

切忌随他覓、迢迢与我疎。我今独自往、处处得逢渠。渠今正是我、我今不是渠。応須恁麼会、方得契如如。

この偈には、三人称の字が「他」と「渠」の二つ使われていますが、この二つは区別しなければなりません。「他」は川面に映ったおのれの姿、「渠」は真実の自己（本当の自分）

を指しています。この偈を意識すると次のようになります。

川面に映ったおのれの姿に向って、本当の自分を絶対求めてはならない。もし求めればはるかに本当の自分と疎遠になるばかりだ。今ひとり歩いて歩いている時には、真実の自己（本当の自分）に逢うことができる。しかし、真実が先に出てくればよいが、俺が俺がという我が出てくるならば、本当の自分ではない。このように理解して始めて如浄の世界とピッタリと一つになることができる。

『祖堂集』の雲巖曇晟の章には、以上の話



法話を聴く参加者

に続けて次のような後日談があります。

ある人が洞山さんに問うた。「雲巖が『このほかならぬありのまま男がそうだ』といわれましたが、その意味は何でしょうか。洞山、「私は当初、すんでのところでもそのまま肯うところであったが、そうせずに済んだ（某甲当处泊錯承当）。即ち、現実態の自己をありのままに肯って、それで良しとする見解に、自分ももう少しで安住するところであったというのです。」

この言葉が洞山の禅の特質をよく表していると思います。曹洞禅の特質は納まり返らない禅ということができません。道元禅師も「八九成」という言葉を使われますが、十という完成された姿ではなく、十をも超えた動的なところに価値を見出すのが曹洞禅の特長です。

次に洞山さんが雲巖さんのためにお斎を設けていた時の話です。ある僧が洞山さんに問いました、「和尚さんは雲巖さんのところで、どんな指示を得ましたか」。洞山は、「私は雲巖さんの下にいたけれども、雲巖さんの指示は受けなかった」。僧は、「雲巖さんの指示を受けない以上、またお斎を設けてどうするのですか」。洞山は、「雲巖の指示を受けないけれども、敢えて雲巖にそむきもしない」。

また、別のお齋の時に、僧が洞山に問うた、「和尚さまは雲巖さんのためにお齋を設けるのは、一体、雲巖さんを認めるのでしょうか」。洞山は、「全部認めれば、途端に雲巖さんにそむくことになる」。このように全部認めないところにこそ、雲巖さんの禅を受け継いだ洞山良价禅師の見方があるのです。

雲巖さんは悟れなかったと言いましたが、「悟」という世界に落ち着いてしまうと、そこでストップしてしまいます。むしろ悟にとどまらないことこそ、曹洞宗を開かれた洞山良价禅師の素晴らしさがあると思います。それを道元禅師は『正法眼蔵・仏向上事』の巻で述べておられます。

洞山良价禅師の素晴らしさは、最終ゴールさえも更に一歩上に登ろうと、無限の可能性を追求して行くところにあると思います。以上が石井修道先生のお話でした。

師匠の雲巖曇晟が「悟れなかった」とされることから、洞山良价禅師は悟に納まり返らず、悟ってもまだ八九成と思い、更に一歩上に登ろうとするところが、洞山良价禅師の核心である、改めて感じた次第です。

合掌

対談（石井修道先生と東堂老師）

中国禅と道元禅

二〇二二年一〇月三〇日、「洞山禅師千百五十回遠忌」の後、石井修道駒澤大学名誉教授の講演があり、その後、同氏と椎名東堂との対談が行われました。その一部を紹介しましょう。（敬称略、司会は小畑二郎氏）。

小畑 講演から少し離れますが、道元禅師が宋に渡られた時代、中国では臨済宗と曹洞宗はどういう形だったのでしょうか。また、道元禅師は中国の禅とどういふかかわりを持ち、如浄禅師から何を得てこられたのでしょうか。

石井 道元禅師は宋から帰国され『弁道話』を書かれました。その中で「臨済宗のみ天下にあまねし」と記されています。つまり、禅宗では臨済宗が圧倒的な力を持っていました。その臨済宗の中では大慧派の流れが勢力を持っており、道元禅師もそれを実際に体験されたようです。

宋の時代、禅宗には「看話禅」と「黙照禅」があり、二大潮流として、大きな流れになっていました。

黙照禅は「ただ坐る」として、悟りを求めないとされてきました。それを臨済宗の大慧宗杲が克服する過程で、看話禅が生まれてき



対談する石井修道先生と椎名東堂

ました。「悟りが欠けている禅は真の禅ではない」というもので、「黙照邪禅」との批判の言葉を投げかけていました。

釈尊は三五歳で悟られましたが、「悟という経験をしないと仏教は成立しない」というもので、これは経験主義からすると分かりや

すく、仏教の展開につながりました。それが継承されています。

実は道元禪師も全く別の立場から「黙照邪禪」は認めないといわれています。「悟りの立場からする坐禪」を黙照禪は否定されているからです。

道元禪師は臨済宗大慧派が盛んな時代に宋に入られ「修行と悟りとは一等」という全く別の世界をつくられ、坐禪に厳しい如浄禪師の説を承けて帰国されました。

当時、日本に仏教集団として「日本達磨宗」というのがあり、(平安時代に伝わったすべではないとの主張を継承)二代の孤雲懷奘禪師、三代の徹通義介禪師はそれに属していました。かれらは、道元禪師に帰依してきましたが、道元禪師は教えるのにかなり苦労なさったようです。

小畑 道元禪師は宋に渡られた時、高位の典座が食事の材料を買っているのを見てカルチャーショックを受けたそうですが、道元禪師は宋で何を獲得され、日本にどんな禪を普及させたいと考えられたのでしょうか。

椎名東堂 月一回開く、参禅会の例会で『正法眼蔵』を材料にして漫談のような形で話し

ています。禪は行じるものです。参禅会員は作務を一生懸命行っています。

禪は坐禅だけではありません。道元禪師の最も重んじられたのは「行」です。頭ではありません。お茶を入れるのも頂くのもすべて禪です。

最澄や栄西禪師も行を重んじりましたが戒律も重んじられ、四八の戒目(戒律)を定められました。道元禪師はそれを一六にしました。戒律を重んじないわけではなく、それを守り、生活に生かされることを大切にしたいのです。

戒律は一五〇〇項目あるとしていますが、形式ではなく、生かすことが大切です。

小畑 禪では「公案」が重視されていますが、現代人には難しすぎるのではないのでしょうか。

石井 道元禪師は公案を三〇〇ほど集めました。若いころのようです。ただ、中国の公案をそのまま集めてきたのではなく、看話禪とは異なっています。有名な公案に、最初、狗子(いぬ)に仏性が「ある」「ない」の二つの回答がありました。「ない(無)」の一字に集約され、看話禪が成立しました。これは臨済宗大慧派が行いました。

ただ、公案禪と看話禪は異なっています。道元禪師は看話禪ではありませんが、公案を基に説法されています。中国では有名な公案に「塙(かわら)を磨けば鏡になる」というのがあり、すり減るだけだと否定されていますが、道元禪師はそうではありません。悟ったのちの坐禅は磨けば鏡になるとされています。坐禅がそのまま悟りになる「修証一等」を説かれています。

小畑 龍泉院参禅会は「自未得度先度他」(自分が渡る前に他を渡せ)を椎名東堂が設定されています。その精神をお聞かせください。

椎名東堂 前にも述べましたが、禪の骨子は実践することであり、それは言い換えると「行」につきます。いろいろ考えると難しくなります。

両手でたたくと音が出ますが、片手ではどんな音が出るかという「隻手(せきしゅ)の音声」という公案があります。考えていてはだめで、体でぶつかっていけば公案を会得できます。

中国では純粹な禪の時代は唐の時代です。單純なことを、明快にすることで、これは釈尊の修行になぞらえられます。時代が下ると

日本では仏教が盛んになり、これが権力や国家と結びつき、ご祈祷と結びつき、更に観光になってきました。しかし、お寺の基本は修行であり、その中心は坐禅です。

そういう気持ちで、小さいながら坐禅堂を造りました。道元禅師は唐の時代の純粹な仏教を求められ、「只管打坐」の坐禅を打ち立てられました。

ですが、禅師は、坐禅を自己安心のみでなく、利他の菩薩行にせよと勧めました。これが、当山坐禅の理念です。

小畑 ありがとうございます。最後に参禅会代表幹事小畑節朗から謝辞を述べさせていただきます。

小畑節朗 長時間、ご清聴ありがとうございました。龍泉院参禅会は五〇名足らずの小さな会ですが、椎名東堂の「ぶれない姿」を見つめつつ、「只管打坐（ただ坐る）」を実践しています。

座禅会ではなく参禅会と名付けたのは、坐禅だけでなく作務も実践しているからにほかなりません。

皆様のご協力で無事、円成できました。感謝申し上げます。

司会を終えて

我孫子市 小畑 二郎

参禅会発足五十周年記念の講演および対談の司会をとにかくも無事に努めることができ、いまほっとしています。これもひとえに、対談の準備を念入りにご指導いただいた五十嵐さんのご協力によるものと、深く感謝しています。



龍泉院の境内を散策する
石井先生と司会の小畑二郎さん

また、石井修道先生には、ご講演もたけなわに過水悟道の図を示されながら、自己完結を拒否して、悟りへと無限に努力する禅の極意を十分に語って頂くとうとしたとき、急病者が出て、話をさせて頂けなかったことは大変申し訳なく思っています。

椎名東堂には、わが龍泉院参禅会のモツ

トである「自未得度先度他」および「只管打坐」を日常生活における「行」の中に生かしていくという力強い励ましのお言葉に、感銘を受けました。椎名東堂の指導を受けて今日まで「行」を続けてきてよかったという気持ちでいっぱいです。椎名東堂には、今後ともご指導を賜りたく存じます。

ところで、講演の朝、一柱坐る前に、石井先生の境内のお散歩に同行しました。石井先生は、ことのほか龍泉院の自然に感心なさったようで、境内をゆっくりとお歩きになりました。植物に詳しい小林さんの案内で、ヤマユリに注目され、お住いの神奈川県がヤマユリであることをお話になったときの先生は、いかにも嬉しそうでした。生きとし生けるものを大切にしているのだなあと感じました。先生のお人柄に触れる思いでした。

裏話

◆ ◆

今回の「洞山良介千百五十回遠忌」では小畑代表幹事から多額の喜捨をいただきました。講演から各種行事の弁当、お土産等々。参禅会は財政が枯渇していたので、この喜捨がなければ実行できませんでした。あらためて感謝申し上げます。

参禅会五十周年記念行事を終えて

松戸市 小畑 節朗

令和四年一〇月二日、「在家得度式」、三十日に、「洞山良价禅師千五百十回遠忌法要」と「記念講演会・対談」が新型コロナウイルス流行の間隙をぬって無事、円成いたしました。

これは堂頭老師のご慈慮と両行事幹事のご苦勞と会員の皆様の多大のご支援の賜と深く感謝申し上げます。

申し上げるまでも無く、龍泉院参禅会は昭和四六年（一九七二年）に現東堂椎名老師が始められ、令和三年が発足五〇周年であります。その間、会では五年ごとの節目に周年行事を行い、講演会、眼蔵会、在家得度式、日本・中国の祖蹟巡拝などを行い、弁道増進の一助として参りました。

特筆すべきは、発足四〇周年記念事業として坐禅堂建立を發願し、平成二四年に小規模ながら本格的坐禅堂が会員諸氏の道念努力と有縁の大勢の方々のご支援により円成したことであります。

その發願の根本は、道元禅師のお示しの「自未得度先度他」すなわち「己の渡らぬ先に一切衆生を渡そうと發願し営まん」の理念の実

現でありました。また、その理念の相續が發足四五周年事業の一環としての椎名老師の『やさしく読む参同契・宝鏡三昧』の出版でありました。

この小さな参禅会が、何故、中国曹洞禅の



龍泉院本堂に行った記念行事

開祖「洞山禅師」の遠慮を
行うのかと奇
異に思われる
かと存じま
す。

その理由
は、一つには
『宝鏡三昧』
は洞山禅師の
作品であるこ
と、二つには
椎名老師は平成二二年に臨川書店より『洞山』
の大著を上梓されており、洞山研究の第一人
者でおられることであります。それはまた一
連の流れの到着点でもありました。

参禅会発足後、三年目に入会した私、その
間四七年、様々なことが走馬灯のように去来
いたします。

「坐禅が終わって怒った顔をした人は見た

ことはない」と会員の安本さん。「一人前とは、釈迦・道元と同じレベルの坐禅が出来た人」とは刀工の森岡さん。

「ただ、薄紙を一枚ずつ重ねて行く行である」と前代表の高間さん。皆、故人となった方々の心に沁みる言葉です。

人は皆、歳をとります。運転免許の返上、コロナ禍による外出制限、老病による身体の不調等、坐禅に來られない種々の難しい条件下であります。

小生、参禅会に入会四七年、坐禅に來山された方の内、長く継続する方は多分百人中、一人程かと思っています。一人でも「薄紙を重ねて」行けば将来、五十・六十人が坐っている筈です。

ご覧のように龍泉院は貴重な里山持っている実素晴らしい環境であります。新住職以下、作務の方々の活躍は一目瞭然、輝いております。

此の環境で行じる、一人一人の、坐禅は、お釈迦様より二五〇〇年相續して來た尊い佛行であります。

降った雨が後に泉となつて湧くが如く、次の五〇年が、今日ただ今より始まります。

合掌

成道会

二〇二二年一月四日、第四〇回成道会が開催されました。昨年同様、風のない穏やかな冬晴れでした。

差定に従い、二炷の坐禅後、一〇時半から本堂で開催されました。変異型コロナ「オミクロン株」が再び変異し、八波と囁かれる中、東堂老師、明石住職、参禅会員一五名が参加、会は肅々と、とどこうりなく行われ、三分ほどで終了しました。その後、小畑二郎氏の参禅二〇年記念の表彰式、東堂老師と参加者との問答、明石住職の法話が行われました。概要は次の通りです。

【表彰式】

小畑二郎さんが参禅を始められてから二〇年たったことを讃えられ、東堂老師揮毫の扁額が贈られました。

扁額は「学道漢」と草書を混えた豊かな線の墨書。「仏道を学ぶ真摯な人」という意味だそうです。

【問答】

相澤 二つある。一つは大寺院とはどんな寺院か、もう一つは、龍泉院は大寺院かどうか

椎名東堂 芙蓉道楷禅師は「大寺院とは大

きさや人数で決まるものではなく、行を務めている人のあり方で決まる。三、四人行事を行っていれば大寺院と言える」と述べている。私も同じ考えだ。龍泉院は参禅会が、まじめに行事を行っており、大寺院といえる

佐藤 参禅会に入って一〇年、いまだ「タメ坐禅」。年に六〇日上山し、自己満足していると真剣に悩んでいる

椎名東堂 断捨離。寒さも冬日からという松井 目も耳も悪くなっており、初心を貫きにくくなっている

椎名東堂 松井さんは自発的に作務に力を入れてい。できる範囲で作務を行えばよい

小畑（二郎） 日本は経済も政治もうそばかりだ

椎名東堂 学問、作務、すべてが行持。まじめに行うことだ

杉浦 人間は星屑から生まれ、宇宙は自分を慰めたいたくて人間を造ったというが。悟るにはどうすればよいか

椎名東堂 その説は大いにあり得る。見るもの聞くもの、すべてが悟りのためにある

中島 人生、行く道は無数にあった。しかし、振り替えると、一本道だった（特に返事を求めなかった）

小畑（節朗） 参禅会は五〇年たった。今後の五〇年、どう臨むべきなのか

椎名東堂 私は小畑さんに育てて頂いた。感謝のしようがないほどだ。今後はある時は天に昇って雲となり、ある時は蛇となって泥をかき分ければよい

坂牧 毎日、半紙に『般若心経』を一巻書いている。納経したいが出来るのだろうか

椎名東堂 納経は市販されている納経用の紙に書いたもので、納められている。すでに二〇〇〇枚納められているが、まだ、スペースに余裕がある

齋藤 参禅して五年になるが、病もあり二程度しか坐禅を行っていない。経行はどうあるべきか

椎名東堂 経行はただ歩くのではなく、仏様が歩いているのだ

岡本 三月に会社を閉じ、糖尿病も悪化、気力が衰えている

椎名東堂 これまで通り歩み続けなさい

【法話】

明石住職が「生はひとときの有り様」と題して次の様に話されました。

龍泉院の門前にあった杉の巨木が二〇二一年に安全上の問題から伐採され、その一部が置物になって本堂に飾られています。

植物学者稲垣榮洋氏によると「木の表面は生きた細胞で柔らかいが、木の中は死んだ細胞で硬い。木は生命活動をして外部に向かつて太くなっていくが、木の内側は生命活動を終え、死んで硬くなり、年輪として刻まれていく。どんな大木でも、生きている細胞は樹皮近くの柔らかい部分だけだ。

これは人間にも当てはまる。人間の体は六〇兆個の細胞が集まって作られているといわれているが、その中には死んだ細胞もある。髪の毛や爪がそれで、沢山の表皮細胞は日々、死んで垢になっていく。私たちの体は死んだ細胞と生きた細胞で構成されており、常に細胞分裂を繰り返して、生と死をまわっている」。道元禅師は『正法眼蔵・生死の巻』でも次のように述べられています。

「生より死に移ると心うるは、これあやまりなり。生死はひとときのくらゐにて、すでにさきありのちあり……。かかるがゆゑに、仏法の中には、生すなわち不生という」。

これは「生」は生きているひとときの状態で完成している。「死」は生の終わりでは

なく、死は死として完成している。過去、未来のことではなく、いつも「今、ここ」と「永遠の今」を生き抜くことが、生死の問題を解く唯一の方法であるという意味です。

『生死の巻』ではまた、「生きたらば、ただこれ生。滅きたらば、これ滅にむかいて使うべし。いとふことなかれ、ねがうことなかれ」とも書かれています。

生ある間は心こめて生きること。滅(死)の時は、すなおに死に委ねることです。生死は自分の意思ではどうにもならない。願っても如何ともしがたいことだからです。

「人は死んだ後、再び生にはならない。生死一時のあり方であり、死もまた、一時のあり方である」と説いているのです。



全てが恙なく円成した後、椎名東堂が須弥壇上に飾られたお軸について次のように説明されました。本堂の前にある石碑、山崎弁栄作の「釈迦成道相」の拓本です。現在、石碑には縦にヒビが入っており、関東大震災の折の傷と考えられます。お軸には傷が入っていないので、初拓の一幅と考えられます。泉村の秋元家の末裔より寄贈頂き、それを軸にしたものです。

作務班がそば会席

二月三日一二時、大悲殿の台所で「そばを味わう会」が行われた。集まったのは日ごろ作務に参加していた方々と明石住職の合計一二名。

そば打ちに自信がある松井さんが声をかけ、作務参加者はほとんど集まった。



和気あいあいのそば会

当日は、松井さんが自宅で作ってきたそばに佐藤さんが揚げたてんぷらがそえられ、その美味にみな舌鼓を打った。

禅寺では、食事の時は黙食で、最後に器を洗う沢庵を残すが、この日はそのようなことがない和気あいあいの「無礼講」となった。

歳末助け合い托鉢

昨年二月一日(日)、午後一時から三時まで、「東葛坐禅クラブ」の名称で、年末恒例の歳末助け合い托鉢が行われました。

参加者は椎名東堂、明石住職、参禅会会員八名の計一〇名でした。

当日、午前中は穏やかな気候で日差しもありましたが、午後になると曇り空へ変わり、厳しい寒さを感じるようになりました。

一二時三〇分に柏の長全寺へ集合。本堂前



出発前に長全寺で祈願の般若心経を読経

にて参加者全員で般若心経を唱えた後、出発。柏駅東口コンコースへ到着。ここでは「国境なき医師団」など、他団体も募金等の活動を行っていました。

例年同様、通り過ぎる方は多いのですが、募金をしていただける方はなかなか現れません。厳しい寒さが身に伝え、午前中の温暖な気候が続いてくれていれば……、との思いがよぎります。

募金をしてくれる方が現れば、寒さや疲れも和らぐのですが、残念ながら私のところへは全くありません。

椎名東堂は時折、椅子に腰を掛ける時もありましたが、凜として立ち、お経を唱えながら托鉢に臨んでおられる姿を拜見し、元気が湧いてきます。

午後二時ぐらい、小畑代表幹事と河本氏が托鉢参加者へ挨拶のため訪れ、募金をしてくださいました。午後二時三〇分ごろ、椎名東堂から「あと三〇分頑張りましょう」とのお声かけをいただきました。

終了時刻も近くなり、自分のところへの募金はあきらめていたところ、あるご婦人が立ち止まり、入れてくださいました。ここまで待ったかいもあり、大変ありがたく感じます。



柏駅のコンコースで托鉢

予定時刻の午後三時に托鉢を終了。後片付けをし、現場を去ろうとする際にもあるご婦人から募金をしていただきました。

その後、「ジョンナサン柏駅前店」へ入店し、寄付金を集計し、温かいものをいただいて解散となりました。

皆様よりいただいた善意は計五万八四四三円となり、全額、朝日新聞厚生文化事業団へ寄付をいたしました。

今回、参禅会の托鉢に募金をしてくださった方も、そうでない方も良い年末になることを願っております。

涅槃会

令和五年二月一五日、明石住職と参禅会員一五名でコロナ禍三度目の涅槃会が行われました。この日は、晴れていましたが、お釈迦様の涅槃を悲しむような余寒の厳しい日でした。

例年通り、本堂右手奥に、柏市で最古最大の涅槃図が掲げられました。椎名東堂がケガで入院中のため、空気感は大大きく異なりましたが、式は静謐、厳粛に取り行われました。

準備が迅速に行われ、法要は定刻の二時より、少し早めに開始。目新しいこげ茶の法衣の明石住職が導師として全体を指導され、堂行を五十嵐、維那を杉浦、送迎を佐藤、侍者を松井、侍香を山桐の各氏が務めました。法要は、二時一五分前に、無事円成しました。法要では『般若心経』、『舍利礼文』が全員で唱えられましたが、小畑代表幹事の出された声に導かれる感じがしました。

法要後、明石住職が「初心の心」をテーマに次のように話されました。
住職を拜命してから、今年で三年目になります。三日、三週間、三カ月、三年という区切りがあると言われていますが、ステップを

踏むたびに考えさせられる言葉があります。それは「初心忘るべからず」です。

この言葉は世阿弥が記した『花鏡』の中に出てきます。この言葉に続き、①是非の初心忘るべからず、②時々の初心忘るべからず、③老後の初心忘るべからず、とあります。



法要をする明石住職（導師）と参禅会員

人生にはいくつもの初心があります。①は修行を始めた頃の事に臨む時の初心、②は経験を積んだ時の初心、③は功成り、やり終えた時の初心です。

道元禅師も初心について『正法眼蔵』で次

のように戒めを述べています。

「しかあるを、おろかなる人は、たとひ道心ありといえども、はやく本心をわすれて、あやまりて人天の供養をまちて、仏法の功德のいたれりとよるこぶ。国王大臣の帰依しきりなれば、わがみちの現成と思えり」

これを解り易く言うると、①道心はあっても、もとの志を忘れ、②世間の人の供養をうける機会が多くなり、自分の成果と思う、③名声を得て、我が道の成就したと思う、です。

それぞれ時期、場面において道元禅師の戒めをかみしめたものです。最後に江戸時代の儒学者、佐藤一斎の言葉を紹介いたします。

「少くして学べば、壮にして成すあり。壮にして学べば、老いて衰えず。老いてまなべば、則ち死して朽ちず」

法話後、小畑代表幹事が供物の菓子を提供され、杉浦さんが作られた龍泉福竹製の「難逃之卵」が参加者に贈られました。「病をはじき免ばす」という意味の、かわいらしい縁起物。大変な労作です。

法話後、堂内の後片づけが行われ、小畑代表が丁寧な指導され、大きな涅槃図もしまわれました。その後、希望者が一炷の坐禅を組み、本日の行事は無事に円成いたしました。

想うこと

無事といふこと

我孫子市 清水 秀男

床の間の掛軸に「無事」という墨蹟が掛けられている。揮毫者は関西勤務時代に薫陶を受けた臨済宗の盛永宗興老師である。老師は妙心寺塔頭の大珠院住職で、花園大学学長を八年間勤められた名僧である。

「無事」とは一般的には平穏な事とか健康で元氣な事の意で使われるが、禪語では異なる。

「無事」は中国臨済宗の宗祖、臨済禪師（？～八八六）の語録『臨済録』に出てくるキーワードの一つである。

臨済は、「無事」とは「外に求める心が無くなった」状態であるという。

人間は、仏とは、悟りとは、真理とは、幸福とは何か等、常に外に向かって求め回り、挙句の果てに外的条件に捉われ、自縄自縛に陥って結局、満足な結果を得られない。

外に求める心をやめ、自分自身を内省し、生まれながらにして持っている仏と寸分違わぬ純粹な人間性に気づけば平穏無事な心境に

なるといふ。

私は、この話でメーテルリンクの童話「青い鳥」を思い出した。チルチルとミチルが夢の中で、魔法使いのおばあさんから頼まれて、「幸せの青い鳥」を求めて三つの国を訪れるが持ち帰る事ができない。

二人が夢からさめて家の鳥かごを見ると「青い羽の鳥」がいる。自分達が飼っていたハトが幸せの青い鳥であることを認識するストーリーである。

この話は、幸せを外に求めても得られない。幸せは自分の足もとにある事を教えている。

更に臨済は、無事の人というのは、当たり前前の事を、計らう事なく、当たり前に行じていく日常であるという。それは、大小便をする、服を着る、ご飯を食べる、疲れたら眠る。その日常にこそ、尊厳があり、有難さがあると気づいている人であると説いている。

私事になるが、昨年、食道がんが見つかり、抗がん剤治療に始まり、八時間余に及ぶ食道亜全摘手術、合併症の一つである腸閉塞発症と、入院院の繰り返しで、闘病生活の一年であった。従って令和四年は養生の年となり、参禅会への参加は先になりそうである。

そこで気づかされた事は、生かされている

事の有難さと、食べたり、排泄したり、歩いたり、坐ったり、寝たりの「当たり前」と思っていた日常生活は、実は「当たり前ではない」何物にも変え難い素晴らしいものであり、まさに幸せは自分の足もとにあるという事実である。

「無事」のほんの一端を垣間見たような感じがする。

そして、如何なる逆境の状況に置かれようとも、それを受容し、現前の生活に誠実に一杯向き合い、今生かされている事に感謝し、あるがままに自然体で処しながら精進する。それが「無事」の教えを生かす道であり、墨蹟でご教示頂いた盛永老師のご恩に報いる事だと思っている。

遺伝子学者の村上和雄先生の次の言葉は、今回の病に際して心に響いた箴言だった。

「自分に何か不幸と思える事が起こった時に、これは自分を成長させるための天からのメッセージだと考える事が、その不幸と向き合う事だと思います。逃げようと思っても逃げ切れないわけですから。

「向き合う事で新しい人生が開けてくる」という事です」

私が励まされた言葉

流山市 中島 宏誠

「高くとも射つべく深くとも釣りぬべし」

道元禪師の教えを弟子の孤雲懷奘禪師が残された一節。

私は在職中、一〇七社が加盟する社団法人の協会に出向した。

会員会社は、都市建設に携わる（鉄鋼、電力、ガス、重工、造船、設計事務所、建設、環境設備、電気設備、衛生設備、機械製造、工業薬品等）の企業でした。

一〇七社から派遣された方々は委員会に参加され「都市熱供給システム、エネルギー利用の調査研究、システム導入の支援、情報の収集、システム管理と提供、関係団体への協力、建設省への要望と提言」などの業務を行いました。

私は未経験のことが多く、苦慮していましたが「高くとも射つべく深くとも釣りぬべし」をお聞きし、不安は消え三カ年の任務を無事終ることができました。

合掌

雲堂と供に

松戸市 河本 健治

混迷の世紀!! 何かと変化の激しい現代にあつて、参禅会も同じ波の内にあるのでしよう。今回、『これから』の参禅会のありよう、方向性についても議論されたこと、必然にて、同感しました。

この事項は自身の問題でもあり、今一度、初心を省みて、参禅の動機は何であつたのかを考える好機になりました。

還暦を祝う年、『ガン』が発覚し、四回の手術と片方の肺切除がありました。このことが、後々の生活に影響が出始めた頃、偶然立ち寄った龍泉院にて、何故か懐かしい思いに浸っていました。素朴な自然環境と静寂、雲堂の建設が始まった頃で、その建造物に関心を持ったことも参禅への後押しでした。

仏学、仏道心もないのに、肺の調息一点が参禅の本目だったこと、この延長の歳月であつたことに愕然ともしています。

自身の『これから』においても、現状維持で、出来ることを、無理のない範囲ですること!!

今は、このことしか考えられないのですが、

幸いに、参禅会の良き同心、仲間と供に静かな雲堂にて坐禅が出来ること、ありがたい限りです。また、これからの若い、新しい参禅者の参加に期待したいものです。

合掌

久光守之様逝去のお知らせ

会友の久光守之さんが昨年一二月に逝去されましたので、謹んでお伝えいたします。

・ 逝去月日：二〇二二年二月二日

・ 享年：八六歳

・ 葬儀：二月七日（家族葬）

・ 喪主：久光光世様（奥様）

*ご遺族様の意向で香典・供物の儀は固辞されておられます。

久光さんは四〇歳代から四国遍路を実践され、四、五回は歩かれたと思います。また、写経をよくなされていて、時折り龍泉院へ納経されていました。

堅固な求道心旺盛な巨星落つという思いですが、皆さまと共にご冥福をお祈りしたいと思います。

（杉浦上太郎）

沼南雑記

【定例参禅会・年間行事】
()内は座談の司会者

- 令和四年
- 九月二五日 一二名 (松井 隆)
 - 一〇月二三日 二〇名 (松井 隆)
 - 一一月二七日 四名 (松井 隆)

龍泉院参禅会簡介 (コロナで変更もあります)

- 【参禅】
- 一、定例参禅会
 - ・日時 毎月第四日曜九時(初参加者は八時半) 来山、正午解散
 - ・坐禅 口宣、坐禅、経行、坐禅の順
(坐禅は一炷三〇分、経行は一〇分)
 - ・提唱 木版三通、開経偈、『正法眼蔵』の提唱
 - ・座談 自己紹介・喫茶・座談
 - 一、自由参禅
 - ・日時 毎月第一日曜と第二土曜日
 - ・坐禅 九時から一〇時半まで(入堂九時まで、退堂自由)
 - ※会費無料、年齢・性別など一切不問、初心者には懇切に指導
 - 【年間行事】
 - 一、一日接心 本年は六月四日、四炷の坐禅と提唱等
 - 一、成道会 本年は二月三日、坐禅二炷・法要・問答・法話等
 - 一、他の行事 涅槃会(二月一五日)、花祭り(四月八日)、施食会(八月一六日)、歳末助け合い托鉢(二月一〇日)、団体参禅受け入れ、歳末煤払い(二月例会後)
 - 一、作務 毎月第一と第三金曜、及び第二土曜に境内の掃除等
 - 【会報誌】
 - 一、『明珠』(四月八日と一〇月五日発行)
 - 一、『口宣』(年一回)
- 「ウェブサイト <http://www.gyusenin.org/>」「明珠」「口宣」のバックナンバーをご覧になれます

- 二月四日 一五名 (成道会)
- 二月一一日 九名 (義援金托鉢)
- 二月二五日 一七名 (松井 隆)
- 令和五年
 - 一月二二日 一七名 (佐藤修平)
 - 二月一五日 一五名 (涅槃会)
 - 二月二六日 一九名 (佐藤修平)

- 【自由参禅】
- 令和四年
- 九月 四日(二名)、一〇日(二名)
 - 一〇月 八日(九名)
 - 一一月 六日(九名)、二日(八名)
 - 二月一〇日(二〇名)
- 令和五年
- 一月 一日(四名)、一四日(八名)
 - 二月 五日(七名)、二日(六名)

- 【奉仕作務】
- 令和四年
- 九月 二日、一〇日、一六日
 - 一〇月 七日、八日、二一日
 - 一一月 四日、一二日、一八日
 - 一二月 二日、一〇日、一六日
- 令和五年
- 一月 七日、八日、二一日
 - 二月 三日、一一日、一
- 【五十周年行事実行委員】
- 令和四年
- 一〇月一五日
- 令和五年
- 二月一一日

【編集後記】

▼縁あって六七号から七九号までの六年半、編集を担当しました。ここでバトンタッチします。沢山の事を学び、チームワークの楽しさを感じた編集作業でした。(坂牧)

▼今回で編集委員を降ります。長い間、協力ありがとうございました。ただ、後任を引き受けてくれた杉浦さんの体調が今一つで、苦慮しています。希望者はどんだん名乗り出てください。「自未得度先度他」の精神を発揮する時だと思いませんか。(岡本)

▼今号で退任です。編集仲間と会員読者の皆様に大感謝。四五周年行事「寺宝展」では、「チーム寺宝展」の素晴らしい働きを、年番幹事として傍見しました。その中核メンバーの、岡本さん、坂牧さん、後日加入の吉澤さんと四人の「チームおかもと」で楽しい編集作業の四年間でした。(佐藤)

▼参禅会の新たな出発について小畑代表から話がありました。活動内容見直しの必要性を感じる一方、先輩方が五〇年積み重ねてきた重みもまた感じるところです。ただ、素晴らしい坐禅堂を今後も活用されるためには、参禅会の持続が一番重要と思うところです。(吉澤)

●発行/天 徳 山 龍 泉 院 千 葉 県 柏 市 泉 81 ☎04(7191)1609
●印刷/港北メディアサービス株式会社 渋谷区渋谷2-7-7 ☎03(6803)8470

仏となるには

仏となるに、いとやすきみちあり、

もろもろの悪をつくらず、生死に著するころなく、

一切衆生のために、あはれみふかくして、

上をうやまひ下をあはれみ、

よろずにいとふころなく、ねがふ心なくて、

心におもうことなく、うれふることなき、

これを仏となづく。又ほかにたづぬることなかれ

龍泉院

参禅会会報

参禅会発足五〇周年記念号

●発行／天徳山龍泉院 千葉県柏市泉 81
●印刷／東北メディアサービス株式会社 渋谷区渋谷2-1-7

●04(7191)1609
●03(6803)8470



大観音石像から本堂をのぞむ